

# 面子の「二分論」再考 胡先縉の面子論に焦点を当てて

著者	花澤 聖子
雑誌名	神田外語大学紀要
号	31
ページ	95-116
発行年	2019-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001588/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001588/</a>

面子の「二分論」再考  
—胡先縉の面子論に焦点を当てて—  
**Two Conceptual Aspects of Chinese ‘Face’ Revisited**  
—Focusing on the Chinese Concepts of ‘Face’ presented by Hu Xianjin—

花澤 聖子

**Abstract**

“The Chinese Concepts of ‘Face’” written by Hu Xianjin in 1944 is a pioneering study on Chinese ‘Face’. In that paper she argued that Chinese ‘Face’ had two conceptual aspects, namely, ‘*lian*’ and ‘*mian*’, and provided their definitions. Subsequently, her method of definition caused controversy among researchers. In this paper, first of all, how Hu defined ‘*lian*’ and ‘*mian*’ is grasped. Secondly, the discussion among researchers on Hu’s theory on Chinese ‘Face’ is analytically summarized. Finally, after examining the features of ‘*lian*’ and ‘*mian*’, two conceptual aspects of Chinese ‘Face’ are defined based on new criteria as a hypothesis.

1 はじめに

面子は、1894年、アメリカ人の宣教師、アーサー・H・スミスがその著作 *Chinese Characteristics* の第1章で取り上げて以来、中国人の心理と行動を理解するうえで重要な特質として今日に至るまでずっと注目され続けてきた。

林語堂は、「この顔は心理上のものであり、生理上のものではない」、「名誉に似るが、名誉にあらず」、「それは抽象的で捉えがたいものであるが、中国人の社会的交際を調節する最も微妙な基準である」、「中国人は個人の関係や相手の顔、つまり面子を非常に重視する」と述べ、事実上中国を統治している三人の女神の

うちの一人として「運命」、「恩恵」と並べてその筆頭に「面子」を挙げている<sup>1</sup>。なぜ中国人はそれほど面子に拘るのであろうか。それは近代化の洗礼を受けた台湾社会でも同様であるという<sup>2</sup>。

魯迅は、雑文「说“面子”」（「面子について」）の中で考え出すと漠然としていてはっきりとしないとしつつも、「中国人にとって面子は精神綱領である」<sup>3</sup>と述べている。

面子の学術的研究の先駆けとなったのは、早期にアメリカに留学していた人類学者、胡先縉であり、1944年に *American Anthropologist* に発表した論文“The Chinese Concepts of ‘Face’”<sup>4</sup> において、中国人の面子（顔）について、初めて「<sup>リエン</sup>臉」（かお）と「<sup>ミエンツ</sup>面子」（カオ）<sup>5</sup>に分けて論じ、その定義付けを行った。この二分論的面子観は、その後の中国人の面子研究に少なからず影響を与えた。中国社会の面子を論じる場合、「<sup>リエン</sup>臉」と「<sup>ミエンツ</sup>面（子）」に分けて定義付けする研究者もいれば、分類せず面子として定義付けする研究者も存在するのだが、いずれにしても今日に至るまで様々な面子現象を説明付けられるような面子の定義は存在していない。

そこで本論文では、まず、面子研究の先駆的論文となった胡先縉の上記の論文に立ち返り、胡先縉が「<sup>リエン</sup>臉」と「<sup>ミエンツ</sup>面子」をどのように捉えたかを把握し、胡先縉の面子論は面子研究者の間でどのように議論されたのかを確認することにする。次に「<sup>リエン</sup>臉」と「<sup>ミエンツ</sup>面子」の特徴を整理し、面子の二分論の妥当性を再検討する。そして、最後に、新たな分類視点による筆者の面子の二分論を仮説として提示する

<sup>1</sup> 林語堂著、鋤柄治郎訳（2000）『中国＝文化と思想』講談社、306-312。参照

<sup>2</sup> 朱瑞玲（1989）『「面子」壓力及其因應行為』楊國樞著黃光國譯『中國人的心理與行為』桂冠圖書股份有限公司、177。

<sup>3</sup> 魯迅（1990/1934）「说“面子”」『魯迅選集・雜文卷』山東文艺出版社、441。

<sup>4</sup> Hsien Chin Hu(1944)“The Chinese Concepts of‘Face’”, *American Anthropologist* 46(1), 45-64.

<sup>5</sup> 中国人の面子を「面（子）」と「<sup>リエン</sup>臉」に分けて論じる際は鍵カッコをつけて「<sup>ミエンツ</sup>面子」もしくは「<sup>ミエンツ</sup>面」と表記し、「<sup>リエン</sup>臉」と「<sup>ミエンツ</sup>面子」を合わせたものとして論じるときは鍵カッコをとって面子と表示することとする。訳が必要な時は面子を「<sup>リエン</sup>顔」、「<sup>リエン</sup>臉」を「かお」、「<sup>ミエンツ</sup>面子」を「カオ」と訳し区別することとする。「<sup>リエン</sup>臉」は「<sup>リエン</sup>臉」の簡体字である。以下多用するため、「<sup>リエン</sup>臉」と「<sup>ミエンツ</sup>面子」の中国語の発音ルビは省略することとする。

ことにする。

## 2 胡先縉の提示した面子の二分論

胡先縉は日常性の中で起きる様々な出来事や場面において中国人の面子に対する意識を考察し、中国人の面子には二つの異なる判断基準があるとして、それを「顔」を意味する二つの単語、すなわち「臉」と「面子」を用いて提示した<sup>6</sup>。「臉」と「面子」は二つの異なる心理と行動を示しているというのだ。

胡先縉は『『臉』は道徳的に良い人が有する集団からの尊敬』であり、人の品格の基本条件であると定義した。一方、「面子」については「人が正当な手段で手に入れた名声と人望、即ち名誉である」と定義した。

人は「臉」を保つために道徳的規範のみならず、伝統・風習・常識といった社会規範を守り、教養や地位の高さに相応しい行いをしなければならず、振る舞いもその立場や地位、役割に「相応しいもの」でなければならない。人は目に見えない群衆が自らの振る舞いを監督しているかのように意識するという。ここでいう「相応しいもの」とは当然のことながら、集団の成員に共有される文化的価値を反映したものに他ならない。

人が「臉」を有するということは、その人が社会で共有される行動規範に合致した行動をとる人であることを意味しており、その人が正直で職責を守る人だという社会からの肯定であり信頼でもあるという。

落ち着きある穏やかな態度や謙虚さは、修養により培われた態度として称賛されるが、道徳的規範に違反したり、個人の地位や役割に相応しくない行為をしたりすると、個人の品格を落とすのみならず、甚だしい場合は家族の名誉や人望に影響し、その人と同じ人間関係のネットワークに属する人にも影響を及ぼす。中国社会における人間関係のネットワークは「<sup>クアンシワン</sup>関係網」と呼ばれる。

<sup>6</sup> 胡先縉 (2004/1944)「中国人的面子观」黄光国・胡先縉等著『面子—中国人的权力游戏—』中国人民大学出版社, 40-62. “The Chinese Concepts of ‘Face’”, *American Anthropologist* 46(1), 45-64. の中国語訳である。

人が「丢脸」（かおの喪失）を意識した時、その人は社会からその人の品格に対する信頼を失ったということであり、人から軽視され、孤立する可能性が高い。「脸」を失った人や「脸」はいらないという行動をとる人とは、誰も付き合いたいとは思わないと胡先縉は指摘する。なぜなら、道德規範や社会規範を共有できない人の行為は予測する方法がなく、信頼もできないからである。このような人が困難や不利な立場に陥ったとしても、誰もこの人に道德的物質的支援を提供したいとは思わないため、人間関係のネットワークを頼りにすることができず、孤立に陥る。それを、人々は社会の道義を顧みなかった「報い」だと考える。そのため、「脸」は、社会で共有されるべき道德規範や社会規範に違反する行為を制限しているのみならず、誰も孤立を恐れるので、内在的な制約力となっているという。

一方、「面子」が示すものとは人が築き上げた名声と人望、即ち「名誉」であるという。胡先縉は「面子」を確立する要素として、高い地位、富、権力、才能、著名人との社交関係、高尚な品格等を例として挙げている。

「面子」は社会の称賛、肯定的な評価によって増すものである。盛大な誕生日会やお祝の宴、良い嫁入り道具はいずれも「面子」を増すものである。これらの例はその家の権勢や財力を示していると解釈できる。

「面子」は社会的上昇を切望する人にとって重要なものであり、自分の名声や名誉を高めてこそ初めてとんとん拍子に出世できるのだという。「面子」には人を出世させる力があるということである。

「脸」は一つの分けることのできない実体を形成しているのに対し、「面子」は多寡のあるもので、かつ貸し出したり、勝ち取ったり、加えたり、押し広げたりできるものである。

二つの概念の関係性についてだが、胡先縉は『脸』は品格の基本要件である一方、同時にそれは『面子』の多寡を決定する条件の一つでもある。一旦『脸』

を失うと『面子』はとても維持し難い」<sup>7</sup>と述べている。

「臉」を失った時の人に与える影響は、「面子」を失った時より深刻度ははるかに大きいということになるが、なぜ「臉」が「面子」の多寡に影響を与えるのか、なぜ「臉」を失うと「面子」も維持し難くなるのか、その理由については説明されていない。

また、全国各地の風俗の違いによって、ある行為がところによって「臉」を失う行為だったり「面子」を失う行為だったりというように、「臉」と「面子」は完全に独立した概念ではなくある所では重なる概念であるが、個人の行為に評価を与える二つの異なる基準と係わることは明らかだと胡先縉は結論付けている。

### 3 胡先縉の面子論を巡る議論

胡先縉が提示した二つの判断基準とそれを基に面子を「臉」と「面子」に分けて論じることの妥当性について、その後、主に中国系の研究者の間で様々な意見が出された。

胡先縉が提示した二つの判断基準とそれを基に面子を「臉」と「面子」に分けて論じることには条件付きで賛同する研究者、妥当ではないとする研究者、二分して論じることには賛同するが、その分類基準については独自の基準を用いる研究者など様々で、多様な議論が展開された。

#### 3. 1 胡先縉の二分論に賛同するケース

台湾の心理学者黄国光と香港の社会学者金耀基は胡先縉の二つの基準による面子の二分論を基本的に受け入れている。

金耀基は「臉」が道徳的要素を含むとする胡先縉説を基本的には承認したが、「臉」と「面子」という二つの単語を用いて表現するのは妥当ではないとした。

---

<sup>7</sup> 前掲「中国人的面子观」黄国光・胡先縉等著『面子—中国人的权力游戏—』中国人民大学出版社, 59.

なぜなら中国の方言である広東語や客家語では、「顔 (face)」を表す単語として「面」があるのみで、「臉」はなく、「面」が共通語の「臉」と「面子」を包括しているため、金耀基は胡先縉の言う「臉」を「道德性的面」(道德性の面子)、「面子」を「社会性的面」(社会性の面子)と表現することを提案した<sup>8</sup>。

金耀基は『『面子』は社会的身分、政治権力、学術的修養といった個人の業績に対する社会の承認であり、『臉』は己が行為規範にのっとって相応しい行動をしているや否やに対する自己の判断である。前者は社会的功績を示し、後者は、個人の道徳的人格を示す』<sup>9</sup>と述べている。

黄国光は金耀基の提案に賛同し、面子の概念は「道德性の面子」と「社会性の面子」の二つに大きく分けられるとした。「道德性の面子」は「個人の道徳的品格の完成度に対する社会からの信頼を表しており、個人が身を処する基本的アンダーラインである」と定義し、「社会性の面子」は「自らの才能、努力あるいは能力によって人が獲得した地位である」<sup>10</sup>と定義した。

### 3. 2 二分論を取らないケース

香港の心理学者である何友暉は1974年、*American Journal of Sociology*に“On the concept of face”<sup>11</sup>を発表し、「面子」は全く道徳的内容を含まないわけではなく、状況によっては「臉」と「面子」は互換性もあるため、両者を完全に区分することはむずかしいと考え、概念的に道徳と係わるか係わらないかで区分するのは妥当ではないという結論に至った。結局、何友暉は周美伶と共著の論文の中で、二分論を取らず、面子について「面子は自己が他者から獲得した社会的尊厳ある

---

<sup>8</sup> 金耀基 (2006) 「『面』、『耻』与中国人行为之分析」 杨国枢主编『中国人的心理』江苏教育出版社, 253-254. なお King と Myers も 1977 にすでに同様の指摘を行っている。

<sup>9</sup> 前掲 (1989) 「『面子』壓力及其因應行為」 楊國樞著黃光國譯『中國人的心理與行為』桂冠圖書股份有限公司, 177. 杨国枢主编前掲書, 253.

<sup>10</sup> 黄光国 (2004) 「道德臉面与社会臉面：儒家社会中的依附性自尊」 黄光国・胡先縉等著『面子—中国人的权力游戏—』中国人民大学出版社, 180.

<sup>11</sup> Yau-fai Ho (1976) “On the Concept of Face,” *American Journal of Sociology* 81(4), 867-884.

いは他者が承認し認可したパブリックイメージ」<sup>12</sup>と定義した。

台湾の陳之昭は胡先縉の見方は社会の一般的な価値を重視しており、不良少年の集団などでは、獐猛な方がより大きな面子を有することの説明がつかないとし、道徳性に係わるや否やで「臉」と「面子」に区分することに難色を示した<sup>13</sup>。社会の第2次集団には風習や習慣、行動規範など、その集団で共有される独自の文化を持つ集団もあり、こうした集団のメンバーが有する「臉」は胡先縉の定義から明らかにはみ出してしまうからである。

結局、陳之昭は面子について、「自己あるいは自己に係わる対象が有しかつ自己が重視する属性において、重要な他者がその属性を評価したことを認知したのちに形成される社会的意義あるいは付き合い上の自己イメージ」と定義している<sup>14</sup>。

### 3. 3 異なる基準による二分論を取るケース

ハワイ大学の哲学者成中英は、胡先縉の分類基準とは異なる基準で「臉」と「面子」を論じている。

成中英は「臉」は人が他者と付き合う際にかぶる「保護性のお面」で、礼儀、礼節、風俗といった社会規範と一致させることで、保護し維持しなければならないものと捉えた<sup>15</sup>。「面子」については「主観的面子」と「客観的面子」の二つに分けて論じた。「主観的面子」とは「自己が推断する自己に対する社会からの尊重と社会的地位」であり、「客観的面子」が示すものは、他者から認可された実際の社会的地位」と定義した<sup>16</sup>。また、「主観的面子」が示すものは、具体的には社会関係と社会全体との係わりにおいて、個体の自尊の価値と自らの重要性

<sup>12</sup> 周美伶・何友暉（1992）「從跨文化的觀點分析面子的內涵及其在社會交往中的運作」楊國樞・余安邦主編『中國人的心理與行為：理念及方法篇』桂冠圖書股份有限公司，232。

<sup>13</sup> 陳之昭（2006）「面子心理的理論分析與實證研究」楊國樞主編『中國人的心理』，125

<sup>14</sup> 同上，125。

<sup>15</sup> 成中英（2006）「臉面觀念及其儒學根源」翟學偉特約主編『中國人社會心理學評論』第二輯，社會文獻出版社，39。

<sup>16</sup> 同上，36。

であり、「客観的面子」が示すものは、社会やコミュニティでそのメンバーから認可された社会的地位であるとも定義している<sup>17</sup>。「脸」と「面子」の関係は儒家の言う所の「実」と「名」の関係であり、一つの「実」から多くの「名」が発生すると述べている<sup>18</sup>。

大陸を代表する面子研究者である翟学偉は、「脸」と「面子」はともに多かれ少なかれ道徳性と係わりまた係わらなくてもよく、道徳性で以ってこの二つを区分するのは妥当ではないとしたが、定義付けは「脸」と「面子」に分けて行っている。

翟学偉の「脸」と「面子」に対する定義は面子に関する研究の深化に伴い変化するが、2011年の著作『中国人的脸面观—形式主義的心理動因与社会表徵』では、『脸』は個体（あるいは集団）が社会圏内で共有される要求に迎合するために、自己あるいは自己に係わる人に有利な方法と工夫によって、ある社会情況下で示す他者の期待に合致したイメージ」と定義し、「面子」については、「あるイメージを有する個体（集団）が他者の評価と自己の期待が一致するや否やを判断する心理過程及びその結果であり、その基本目的は、他者の心の中で自己の序列的地位すなわち心理的地位を獲得あるいは維持することである」と定義した<sup>19</sup>。また、「脸」と「面子」の関係性については、基本的には「脸」は「面子」の第1歩であり「面子」は「脸」の第2歩であるというように捉えた<sup>20</sup>。しかし、なぜそうなるのかその理論的根拠は示していない。

以上、各研究者の研究成果に基づけば、胡先縉が提示した二つの基準は、「脸」と「面」がどちらも道徳性を含んだり、互換性もあったり完全には二分できないという理由や、不良少年の集団などの社会の第2次集団には当てはまらないとい

---

<sup>17</sup> 同上, 36.

<sup>18</sup> 同上, 44.

<sup>19</sup> 翟学偉 (2011) 『中国人的脸面观—形式主義的心理動因与社会表徵』北京大学出版社, 92-93.

<sup>20</sup> 翟学偉 (1994) 『面子・人情・关系网』河南人民出版社, 60.

う理由によって、分類する基準として妥当ではないということになるだろう。

それでは面子の二分論についてはどうであろうか。

何友暉も陳之昭も二分論を切り捨てているが、成中英と翟学偉は胡先縉が提示した二つの判断基準には否定的ではあるものの、「脸」と「面子」に分けて面子を定義付けている。

面子は面子として論じられ、一元的に定義されるべきなのであるだろうか、それとも「脸」と「面子」に分けて論じられ定義されるのが妥当なのであるだろうか。もしそれが妥当だとするならば、何を以って分類基準とすることができるのであるだろうか。

次章では「脸」と「面子」の特色を整理することを通して、面子を「脸」と「面子」に分けて論じることの妥当性について検討することとする。

## 4 「脸」と「面子」の特色

### 4. 1 「脸」と「面子」の共通点

周美玲と何友暉は「面子は社会的相互作用の産物であり、情況に依拠するものである」<sup>21</sup>と指摘し、翟学偉も「脸」と「面子」はどちらも人と人との交際や相互作用と密接な関係があると述べている。人と人との相互作用や人間関係と深く係わる概念という点は「脸」と「面子」の双方に共通するところである。

ただ、黄光国が、中国人は家族の間では「面子」を気に掛けないということを描している点は注目に値する<sup>22</sup>。黄光国ばかりでなく、江可海によるインタビュー調査の中にも同様な発言があり<sup>23</sup>、また筆者の中国文化概論の授業における中国からの留学生のリアクションペーパーにも、家族の間では面子は気にしないと書く学生が毎年いるのである。「脸」は常に失うことのできないものであ

<sup>21</sup> 前掲「從跨文化的觀點分析面子的內涵及其在社會交往中的運作」楊國樞・余安邦主編『中國人的心理與行為：理念及方法篇』，244。

<sup>22</sup> 黄光国（1988）「人情与面子：中国人的权力游戏」杨国枢主编『中国人的心理』桂冠图书公司，227.231。

<sup>23</sup> 江可海著，佐藤嘉江子訳（2000）『中国人の面子』はまの出版，76。

るので、ここでいう面子は「面子」のことであると考えられる。家族という人間関係ではなぜ「面子」は気に掛ける必要がないのか、「面子」とは何かを考える際に重要な手掛かりと言えるのではないだろうか。

もう一つの共通点は、ある人の「脸」や「面子」に変化があると、どちらもその人と係わる人々に影響を及ぼすということである。とりわけ家族という最も親密な人間関係にある人々に対してより大きな影響を及ぼす。例えば、親の地位が高くなると、親の「面子」ばかりでなく、その家のその他のメンバーの「面子」も大きくなる。もし子供が犯罪者となれば、当人ばかりでなく家のメンバー全員が「脸」を失う。中国人の自我は「関係自我」<sup>24</sup>とも「家我」<sup>25</sup>とも呼ばれる家との一体感が強い自我なのである。他者にいかに良い印象を与えるか教えられ、親の「脸」に泥を塗るな、親のために「面子」を争え、学校のために「面子」を争えと「面子」に集団意識を吹き込むと金耀基は指摘している<sup>26</sup>。

#### 4. 2 「脸」と「面子」を構成する要素

ここでは、「脸」と「面子」を構成する要素を整理してみることにする。

まず、「脸」はどのような要素と関わってくるのかを見てみよう。

胡先缙は道徳規範、伝統、風俗、常識といった社会規範、教養や地位の高さに相応しい振る舞い・態度、品格等を挙げている。例えば落ち着いたきのある穏やかな態度や謙虚さは、修養により培われた態度として称賛される。

成中英は「脸」は他者と付き合うときに着ける保護性のお面で、礼儀、礼節、風俗といった社会規範と一致させることで保護されるとしている。また、「脸」の基本内容は儒家のいうところの五倫であるとも述べている<sup>27</sup>。

<sup>24</sup> 黄光国 (2004) 「华人社会中的脸面与沟行动」 黄光国・胡先缙等著『面子—中国人的权力游戏—』中国人民大学出版社, 68.

<sup>25</sup> 卜长莉 (2003) 「“差序格局” 的理论诠释及现代内涵」『社会学研究』第一期, 21-22.

<sup>26</sup> 前掲『『面』、『耻』与中国人行为之分析』 杨国枢主编『中国人的心理』江苏教育出版社, 260.

<sup>27</sup> 前掲『脸面观念及其儒学根源』 翟学伟特约主编『中国人社会心理学评论』第二辑, 社会文献出版社, 42-43.

翟学偉は「脸」を「ある社会状況の下で示す他者の期待に合致したイメージ」と定義しており、個体の印象をよく見せるための資源として、気質、性格、知識、能力、道徳、風格、風貌、態度、人柄、外見、服装、言葉等を挙げている。

不良少年の集団やマフィアの集団といった社会の第2次集団にもそれらの集団で共有される掟や行動基準があり、評価はそれらに合致するや否やが基準になるということだろう。

「面子」を確立する要素として胡先縉は高い地位、富、権力、才能、著名人との交際関係、高尚な「品格」等を挙げている。社会的地位や財力、権力、能力、職務、学識といった個人が努力によって獲得した業績や成果のみならず、性別、家柄、身分、地位、評判、祖籍、財産、権威、関係網といった帰属的な地位によって人が生まれながら手にしている要素も含まれる<sup>28</sup>。そのほか美貌など生まれながらにして個人が有する他者より優れた資質も「面子」を構成する要素として挙げられる。

道徳性については何友暉は「脸」と「面子」のどちらにも含まれるとしているが、翟学偉は道徳性は「脸」と「面子」のどちらにも含まれても含まれなくてもいいとしている。陳之昭が指摘した第2次社会集団のことも念頭に置いていると考えられる。

金耀基は「社会性の面子」について量的概念で増えたり減ったりするものであり、その大小は「身分や地位の高低や富、権力、<sup>クアンシ</sup>関係といった社会的資源の多少によって決まる」<sup>29</sup>と指摘し、「社会性の面子」を構成する要素が社会的資源からなることを示唆した。上記に示した「面子」を確立する要素は何れも社会的資源としての特質を持っていることが見てとれる。

以上整理してみると能力は「脸」と「面子」のどちらにも係わる要素であるこ

<sup>28</sup> 翟学偉 (1995) 「中國人的面具人格模式」『二十一世紀雙月刊』32(12), 151. 前掲「人情与面子: 中国人的权力游戏」杨国枢主编『中国人的心理』桂冠图书公司, 240.

<sup>29</sup> 前掲『『面』、『耻』与中国人行为之分析』杨国枢主编『中国人的心理』江苏教育出版社, 256.

とがわかる。能力は人の道徳性や品格には直接的には係わらないように思われるが、なぜ、「脸」を構成する要素にもなるのだろうか。

#### 4. 3 「脸」と「面子」の主な相違

「脸」と「面子」にはまず、構造的違いがある。

人はどの人も一つの「脸」を持ち、その「脸」は一つの分けることのできない実体を形成している。それに対し「面子」の方は、多寡のあるもので、増えたり減ったりする。「脸」は「面子」の多寡を決定する条件の一つでもあり「脸」を失うと「面子」も維持し難い。

「脸」が固定的で絶対的であるのに対し、「面子」の方は、対する他者との関係性や状況で決まる動的かつ相対的なものである。人は異なる時と場所で、異なる「面子」を持ち、また同一人物でも、対する他者との関係性が異なれば自ずと与えられる「面子」は異なってくる。人の「面子」の大小は相対的なものだが、「面子」が大きいということは、他者に対するより大きな影響力を有し、他者からの尊重を受け、目的を実現する機動力や権威を有するということである<sup>30</sup>。

次に「脸」と「面子」が人と人との係わり合いにおいてどのように係わっているかまとめてみよう。

「脸」があるということは社会からの肯定と信頼があるということであり、人は「脸」の無い人とは安心してつきあえない、信頼が成立しないと考える。その結果、「脸」を失うと人は孤立し、不安に陥らざるを得ない。

一方、「面子」は他者をお願いを求める際の基盤となるものであり、人間関係を維持したり強めたり弱めたり相互に尊重し合う上で、重要な働きをしている<sup>31</sup>。林語堂は面子について「社会的交際を調節する最も微妙な基準である」と述べて

---

<sup>30</sup> 前掲「脸面观念及其儒学根源」翟学伟特约主编『中国社会心理学评论』第二辑，社会文献出版社，37。

<sup>31</sup> 同上，37。

いるが、二分論からするならば、人間関係を調節したり取り持ったりするのは「面子」の方である。

「面子」を失ってもまた頑張って取り返すことができるが、「臉」を失うとなかなか立場を回復することはできないので、「臉」を失った時のダメージは、「面子」を失った時と比べ者にならないほど厳しい。胡先縉は少女時代に、家の使用人が不誠実なことをしたので、一度ビンタしたことがあったが、失われたのは胡先縉の「臉」であり、このことによって長いこと家族から責めを受けなければならなかったという体験を書いている。一方使用人の方はほかの人の非難も受けなかったということである。立場にある人はその立場に相応しい行動をとらなければならないのである。

胡先縉も成中英も、「臉」と「面子」の関係性において表現の仕方は違うものの、どちらも一つの「臉」が多くの「面子」を生じさせると指摘している。なぜ一つの「臉」が多くの「面子」を生じさせ得るのかについて理論的な説明はなされていないが、やはりなぜなのか解明されなければならない問題である。

以上、「臉」と「面子」の特色を整理してみると、両者は構造的にも機能的にも大きく異なることがわかる。従って面子の二分論は認められるべきであり、「臉」と「面子」に分けて定義付けられるべきであるという結論に達せざるを得ない。

しかし二分論に基づいて面子を論じるには、どのような基準によって「臉」と「面子」を捉えるべきなのだろうか。

次章では、筆者の分類視点による「臉」と「面子」の概念規定について仮説を提示し、最後にその概念規定を下敷きに本論で取り上げた他の研究者が面子を論じる際に筆者が疑問に思った事象について考察することにする。

## 5 人間関係と面子の二分論

### 5. 1 人間関係のプロセスと「顔」

人間関係論によると、人間関係には他者との関係の開始、成立と発展、維持と崩壊といったプロセスがある。

人間関係は、家族関係や職場の人間関係といった選択の余地のない与えられた人間関係を除いて見知らぬ他者と出会うことから始まるが、人間関係論によると、人は一般的に「相手に対して好意をもつことから人間関係をスタートさせる（傍点は筆者の加筆による）」<sup>32</sup>という。それでは相手のどのようなところに私たちは好意を感じるのだろうか。

人間関係論によると、「望ましい性格」、「能力」、「身体的魅力度などの外的魅力」、「自分の望む印象を相手に与える自己呈示」が挙げられている<sup>33</sup>。

4.2 で示した「顔」を構成する要素となる態度、品格、気質、振る舞い、風貌、人柄、外見、服装などは、主に「望ましい性格」や「外見的魅力」の提示に係わる資源となるものであり、社会規範は自らが社会的役割の果たせる信頼に足る人間であることの「自己呈示」に係わる資源と考えられる。

能力についてだが、「能力には知的能力、身体能力など様々な能力があるが、他の条件がすべて同じである場合であれば、優秀な人はそうでない人よりは好感が持たれやすい。しかし、個人がどのような能力を重要と思い価値を置いているかによっても、相手に関する好感度は異なると考えられる。」<sup>34</sup>いずれにしても、能力は「面子」の資源であるのみならず「顔」の資源ともなり、相手の好意を引き出す働きもするのである。

「顔」の無い人とはだれも付き合いたいと思わないということ、つまり「顔」の無い人にだれも好意を持ってないということであり、従ってそういう人との人間

---

<sup>32</sup> 青池慎一他 (2013) 『要説人間関係論』 樹村房, 16.

<sup>33</sup> 同上, 17-23. 参照

<sup>34</sup> 同上, 18-19.

関係は開始も成立もしないということになる。

また、「臉」を失うと人的ネットワークから排除され孤立することになり、困ったことがあってもだれの援助も受けられないという現象からは、「臉」があるということが人間関係の維持の前提条件であり、人的ネットワークのメンバーであるための「資格」のような働きをしているということが見出せる。それゆえに「臉」を失うと、最悪の場合家から勤当されるということもあり得るのである。黄光国の「臉」に対する「個人が身を処する基本的アンダーラインである」という指摘が想起される。

進化倫理学によると好意すなわち、好きという感情は、人間関係の開始に作用するのみならず、他者との相互扶助、すなわち互惠関係の構築に向けて作用するということであり、嫌いな人とは互惠関係は築けないということである<sup>35</sup>。

従って、「臉」は人間関係におけるプロセスという視点から見れば、関係の開始や成立、維持に不可欠な「好意」、好きという感情の醸成に係わる資源からなる概念であるということが言えるのである。「好き」「嫌い」の感情は分けることのできない一つの実態であり、「臉」を有することが人間関係の開始、成立、維持の前提条件であり、人間関係の基盤となっていると考えられる。

人間は社会的動物であり、他者との相互作用における互惠なくしては生きられない。それ故に「臉」を失うと社会での正常な生活を営むことが難しくなってしまうのである。「人要臉，樹要皮」（人には「臉（かお）」が必要であり、樹には皮が必要である）と言われる所以である。「臉」は生きるために失ってはならないものということになる。

## 5. 2 人間関係のプロセスと「面子」

中国人の人的ネットワークは「クアンシワン関係網」と呼ばれる。クアンシ関係構造は、例えば、個

<sup>35</sup> 内藤淳（2009）『進化倫理学入門』光文社、86-89. 参照

体 A と個体 B、個体 A と個体 C、個体 A と個体 D……というように、A を中心とする二者関係を基本構造とし、B も C も D も……みんなそれぞれ自己を中心として同様の関係を持っている。そして、互いに相手の関係を利用することができるために、「<sup>クアンシ</sup>関係網」と呼ばれる蜘蛛の巣状に広がる中国式の人的ネットワークが形成され、それぞれの人が自己を中心とする自らのネットワークを持っているのである。ネットワークの大きさには大小の違いはあるものの、このネットワークの内部、すなわち<sup>クアンシチュアン</sup>関係圏内では、多種多様の社会資源が流れ、中心となる個の自己利益が守られる構造になっている。

人間は生きていくために必要なもののほとんどを他の人との社会関係によって手にいれている。「周囲の人とモノや情報、『お世話』などを交換する関係をたくさん築けば、自分の資源獲得機会がそれだけ広がって利益になる」<sup>36</sup>という訳である。

このネットワーク内においては、<sup>フイバオ</sup>互惠原則と回報原則（お返し原則）が守られるべき重要な行動原則であり、それが義務であり、責任であるという倫理観にまで高められている<sup>37</sup>。五倫など、今日に至っても儒家の倫理が色濃く残っているからである。関係圏内の互惠の程度は相手との関係性によって程度が異なり、最も親密である家人関係すなわち家族関係あるいはそれに準じる関係では無条件の互惠が美德とされている。

親子関係のような身内の関係では、無条件の相互扶助が基本だが、<sup>シュウレンクアンシ</sup>熟人関係すなわち友人同士や知人との付き合いでは、相手との関係性を考えながら、また相手のお返し能力を考慮しながら互惠を進めることになる<sup>38</sup>。

相手のお返し能力とはほかでもなく、その人が有している社会的資源の大小を

<sup>36</sup> 前掲『進化倫理学入門』光文社、86。

<sup>37</sup> 楊國樞（1992）「中國人的社會取向：社會互動的觀點」楊國樞・余安邦主編『中國人的心理與行為：理念及方法篇』87-142。参照

<sup>38</sup> 前掲「人情与面子：中国人的权力游戏」黄光国・胡先缙等著『面子—中国人的权力游戏』中国人民大学出版社、1-39。参照

意味しており、多ければ多いほどネットワークの中で尊重されることになる。4.2 で見たように「面子」は社会的資源からなっており、4.3 で示したように、成中英は、『面子』は他者にお願いを求める基盤」と表現している。お願いをして受け入れられるということは、資源分配者が依頼者のお返し能力を認めたということであり、そのことは依頼者の「面子」が認められたことを意味し、依頼者は自尊心を感じるようになる。翟学偉も「面子」は「自尊」や「尊重」といった意味に近いと述べている。

3.3 で示したように翟学偉は『面子』の基本目的は他者の心の中で序列的地位すなわち心理的地位を獲得あるいは維持することである」とも述べている。資源分配者の関係圏内クアンシチュアンにおいて自らの位置付けが低ければ資源は関係圏内の別の他者に回される可能性もあるのである。お願いが断られると、其の断り方によっては断られた人の「面子」が潰されたことになり、時として関係は崩壊することになる。

多くの社会的資源を持つ人つまり「面子」が大きい人からはより大きな「お返し」を期待できると同時により頻繁な互恵行動が行われる可能性があり、このことによって、関係は維持されるのみならず強められることになる。胡先縉の言うようにとんとん拍子の出世も夢ではなくなるのである。4.3 で示したように成中英が「面子」は人間関係を維持したり強めたり弱めたり相互に尊重し合う上で重要な働きをしていると指摘していることと合致する。

以上の考察から、「面子」は社会的資源からなる概念であり、中国式の人的ネットワークの中での互恵行動に係わり、主に資源のやり取りを通じた関係の強弱クアンシの調節と発展に係わる概念であるということが言えるだろう。

## 6 おわりに

以上、「脸」と「面子」について人間関係のプロセスとどのように係わるかという新たな視点に基づいて「脸」と「面子」の概念を説明付け、両者がそれぞれ

好意という感情の醸成に係わる資源と互恵に係わる社会的資源という人間関係の構築になくてはならない資源からなり、人間関係のプロセスに異なる側面から係わる概念であることを明らかにした。

「脸」と「面子」が重なる所があるように見えたのは、「能力」のように「脸」と「面子」の双方にまたがってその資源となる要素があったためである。また、マフィアのような特殊な第2次集団ではなく一般的な社会においては、立派な品格も「脸」を構成する要素のみならず「面子」を構成する資源にもなるのである。このようにそれぞれを構成する要素に重なるところがあることによって、これまでの面子研究がより複雑で不可解なものになっていたと考えられる。

マフィア的な集団にもやはり人間関係の開始、成立、維持、発展に係わる資源があるのであり、それらによってその集団特有の「脸」や「面子」が形成されるということになる。筆者による分類視点に基づけば、こうした社会の第2次集団での面子現象も包括することができるのである。

胡先縉も成中英も共に「脸」が「面子」の多寡に係わると述べているが、その理由については述べていなかった。筆者の「脸」と「面子」に対する概念規定によれば、より立派な「脸」を有していれば、人に与える好感度も高く、より多くの人と人間関係を構築する可能性が高くなる。つまり、自己を中心とするより大きな人的ネットワークを作ることができるということである。人的ネットワークそのものも重要な社会的資源であるため、「脸」は「面子」の多寡を決定する条件の一つにもなると解釈できるのである。

また、胡先縉は 3.2 で示したように「一旦『脸』を失うと『面子』はとても維持し難い」と述べているが、ひどい場合は人的ネットワークから追い出されたり入れなくなったりするのであり、人間関係を維持できない以上、手にしている社会的資源も役に立たず、結局「面子」も立ち行かなくなるということになるだろう。

翟学偉の「脸」は「面子」の第1歩であり「面子」は「脸」の第2歩という表現

も5で示した筆者の「脸」と「面子」の概念に基づいて解釋すれば、理論的に説明付けることができる。一般的には「脸」が認められて関係が成立し、次に互惠行動が始まるのであり、社会的資源からなる「面子」の出番になるということである。

また、家族関係などでは「面子」を気かけないということについてだが、家族関係は人が生まれながらにして有する人間関係であり、極めて固定的かつ安定的な人間関係である上に、家族間もしくはそれに準じる人間関係では互惠は無条件な互惠を美德とするため、お返しクアンシの計算は基本的に問題とされないからであると考えられる。それに対し、「脸」を失うと酷い場合は家から勘当される。家族の成員としての資格を失うのである。

「脸」と「面子」を、「道徳性と社会性」で分類するのではなく、人間関係のプロセスとどのように関わっているかという視点を基に分類し把握することによって、本論の中で示したそれぞれの研究者の論文の中で筆者が疑問に思ったことが解明できたことは、筆者が仮説として提示した「脸」と「面子」の概念規定の有用性を示唆していると思われる。

本論は筆者にとって面子研究の第1歩である。面子現象は極めて複雑なため更に一つ一つ検証を積み重ねていく必要があるからである。本論で提示した「脸」と「面子」の概念規定によって複雑な面子現象をどのように解釈できるのか、心理学、人間関係論、社会学、進化倫理学などの理論や研究の成果を取り込みつつ地域研究としての面子研究を更に深めていく所存である。

## 参考文献

Arthur H. Smith (1894) *Chinese Characteristics*, N. Y. Fleming H. Revell

林語堂著，鋤柄治郎訳（2000）『中国＝文化と思想』講談社

鲁迅（1990/1934）「说“面子”」『鲁迅选集・杂文卷』山东文艺出版社，441-443.

Hsien Chin Hu (1944) “The Chinese Concepts of ‘Face’”, *American Anthropologist* 46(1), 45-64

胡先缙（2004/1944）「中国人的面子观」黄光国・胡先缙等著『面子—中国人的权力游戏—』中国人民大学出版社，40-62.

朱瑞玲（1989）『『面子』壓力及其因應行為』楊國樞著，黃光國譯『中國人的心理與行為』桂冠圖書股份有限公司，177-212.

朱瑞玲（1988）「中国的社会互动：论面子的问题」杨国枢主编『中国人的心理』桂冠图书公司，189-225.

金耀基（2006/1988）『『面』、『耻』与中国人行为之分析』杨国枢主编『中国人的心理』江苏教育出版社，249-269.

黄光国（2004/1983）「人情与面子：中国人的权力游戏」黄光国・胡先缙等著『面子—中国人的权力游戏』中国人民大学出版社，1-39.

黄光国（2004）「华人社会中的脸面与沟通行动」黄光国・胡先缙等著『人情与面子—中国人的权力游戏』中国人民大学出版社，63-87.

黄光国（2004）「道德脸面与社会脸面：儒家社会中的依附性自尊」黄光国・胡先缙等著『面子—中国人的权力游戏』中国人民大学出版社，179-194.

Yau-fei Ho (1976) “On the Concept of Face,” *American Journal of Sociology* 81(4), 867-884.

何友晖（2006/1976）「论面子」翟学伟主编『中国社会心理学评论』第二辑，社会科学文献出版社，18-33.

何友晖（2006/1994）「面子的动力：从概念化到测量子」翟学伟主编『中国社会心理学评论』第二辑，社会科学文献出版社，65-78.

- 周美伶・何友暉（1992）「從跨文化的觀點分析面子的內涵及其在社會交往中的運作」楊國樞・余安邦主編『中國人的心理與行為：理念及方法篇』桂冠圖書股份有限公司, 205-254.
- 陈之昭（2006/1982）「面子心理的理论分析与实证研究」杨国枢主编『中国人的心理』, 121-188.
- 成中英（2006/1986）「脸面观念及其儒学根源」翟学伟特约主编『中国人社会心理学评论』第二辑, 社会文献出版社, 34-47.
- 翟學偉（1995）「中國人的面具人格模式」『二十一世紀雙月刊』32(12), 149-157.
- 翟学伟（2006/1995）「中国人的脸面观模式」翟学伟主编《中国社会心理学评论》第二辑, 社会科学文献出版社, 217-228.
- 翟学伟（1994）『面子・人情・关系网』河南人民出版社
- 翟学伟（2004）「人情、面子与权力的再产生—情理社会中的社会交换方式—」『社会学研究』5, 48-57.
- 翟学伟（2011）『中国人的脸面观—形式主义的心理动因与社会表征』北京大学出版社
- 费孝通（1985）《乡土中国》三联书店
- 楊國樞（1992）「中國人的社會取向：社會互動的觀點」楊國樞・余安邦主編『中國人的心理與行為：理念及方法篇』, 桂冠圖書股份有限公司, 87-142.
- 杨宜音（2005/2000）「“自己人”：一项有关中国人关系分类的个案研究」中国社会科学院社会学研究所编『中国社会学』第四卷, 上海人民出版社, 232-257.
- 園田茂人（2001）『中国人の心理と行動』日本放送出版協会
- 青池慎一他（2013）『要説人間関係論』樹村房
- 内藤淳（2009）『進化倫理学入門』光文社
- スティーブ・ピンカー、椋田直子訳（2003）『心の仕組み—人間関係にどうかかわるか—』（上、中、下）NHK ブックス
- 梶田叡一（1988）『自己意識の心理学』東大出版会

神田外語大学紀要第31号

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 31 (2019)

青池慎一，榊博文編（2004）『現代社会心理学—心理・行動・社会—』慶応義塾  
大各出版会

江河海著，佐藤嘉江子訳（2000）『中国人の面子』はまの出版